

私のカルテ

No 4 2 5

結核

津島市民病院 呼吸器内科主任医長

さとう けんた
佐藤健太

結核という言葉をごどこかで耳にしたことがあるかと思
います。本であったりテレビであったり、身近な人にか
かった方がいたり。みなさんの結核に対する印象はどう
でしょうか。昔の病気という印象をお持ちの方もいけば、
中にはかつての不治の病と言われていた頃の印象を
持っている方もいるかもしれません。結核は古代ミイラ
にその痕跡がみられるほど古くからある病気ではありま
すが、決して昔の病気ということなくまだまだ現在でも
存在する病気です。欧米先進国はかなり前から結核の低
蔓延国であったのに比べ日本は長らく結核の中蔓延国
でありました。日本も2021年によろやく結核の低蔓延国
入りとなりましたがそれでもまだ年間に1万人以上の方
が結核を発病しています。

結核は菌をだしている肺結核の人が咳などをした際に
結核菌が空気中に飛び散り、それを周りの人が吸い込む
ことで感染します。ただ感染してもすべての人が発病す
るわけではありません。感染した人の約10%の人が発病
するとされており、感染しても発病しないまま生涯を終
える方も多くいます。発病の多くは感染から2年以内にお
こりますが、その後も免疫力の低下などにより発病する
ことがあります。

結核の発病が疑われた場合、胸部レントゲン検査や
CT検査、喀痰検査などを行います。そこで結核と診断さ
れても全員が入院するわけではありません。検査で結核
菌がたくさん排菌されていると考えられる時は入院治療
となりますが、排菌していないと考えられる場合は外来
での通院治療を行います。

かつては治療法がなく1950年以前の日本人の死因の
トップで「亡国病」といわれた結核も現在では複数の薬剤
を使用して治療することが可能になりました。ただ標準
的には6カ月、時にはそれ以上の期間、薬をしっかりと飲
み続ける必要があります。なぜなら薬を途中でやめてし
まうことにより結核が薬に耐性を持ってしまふとその後
の結核治療に困難が伴ってしまうからです。そのため治
療期間の間、確実に薬を飲むことができるように保健所
等の介入のもと薬の飲み忘れがないか確認する方策が
とられています。

結核は世界的にみるとまだまだ多い感染症であり、日
本ではその数は減ってきているといっても油断は禁物で
す。繰り返しにはなりますがもし結核になってしまったら
まずは出された薬をかかさず飲み続けること、それが基
本ではありますがとても重要なこととなります。

